

# 中川根ふる里通信

= 第61号 =

中川根ふる里通信  
昭和61年4月20日創刊  
編集・発行・連絡先  
〒428-0513  
静岡県榛原郡中川町下長尾  
TEL. 0547-58-0015 859-6  
郵便振替口座 00870-4-81556



中川根ときのアルバムより  
茶摘み風景(昭和30年頃)  
下長尾地区 撮影沢西光男さん

去る二月十七日に中川根町長選挙が行われ、杉山嘉英さんが見事に初当選されました。

町の人口六六四一人に対し有権者数約五四〇〇人はまさに高齢者社会と申せます。町内はもとより、町外からも選挙の動行に強に関心が寄せられる中、町民の町政のリーダー選出の感心度は高く、九〇%にのぼる高い投票率となりました。現職の上野さん、立候補の為に助役職を辞任された小林さんとの三ッ巴戦は、町会議員補選も加わり、激しい戦いとなりました。

結果は、出身地区有権者数約六〇〇人、支持母体を持たない杉山さんが、幅広い支持を得て当選されました。四十七歳の若さは実行力、行動力を期待させ、終始一貫した「町民が主役の町づくりを目指す」の主張は、中川根町を元氣付け、正しい方向に導いてくれると思います。又町民も一人一人が向上の念を抱いて生活すれば、豊かな町になると思います。

それでは町の広報『なにかかわね』四月一日発刊号よりの就任あいさつをお届けします。



## 町民が主役の 町づくり

中川根町長

杉山嘉英

「少子高齢化社会の到来」「地方分権社会への移行と町村合併」「財政難と行財政改革の必要性」「環境問題」など、私たち地方自治体を取り巻く環境は大きな変革の時代を迎えております。直ちに取り組んでいかなければならない課題も多く、町民生活に密着している町政の役割は、ますます大きくなっていくものと考えています。

私はこういふ時代であるからこそ、時代の変化に素早く対応すべきものと、次の世代に残しておくべきもの、あるいは伝えていくべきものをしっかりと見極め、対策を講じていくことが必要と考えます。

また社会が急速に高齢・少子社会に向かい、核家族化が進行している現実に合わせて、それにふさわしい生活・社会の仕組みを作っていくことが求められています。定住促進のための住宅建設、町営バスなどの公共交通網の整備、誰もが健康で安心して暮らせるよう保健・福祉・医療体制の更なる充実と連携、消防団など各種組織の再編などに取り組んでいかなければなりません。

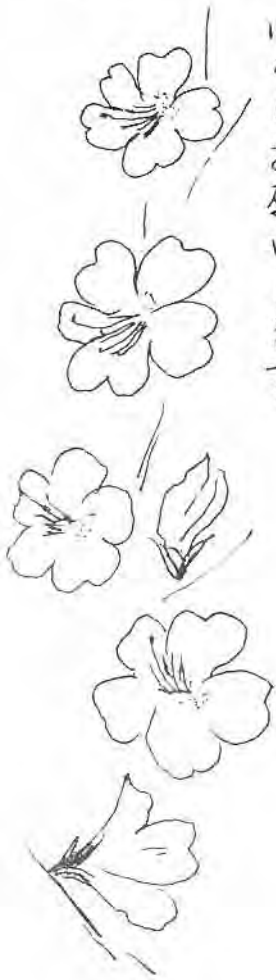
現在の厳しい状況から脱却していくには、改めて原点からの地域おこしが必要であり、自分たちが暮らしている地域をもっと深く知ることにも必要だと思えます。地域独自の自然や風土、伝統や歴史、文化、そして人と人との関係を見直すことで、地域に対する見方かかわり方が変わり、それが地域の活力を取り戻すきっかけになると思います。

これからの「まちづくり」は住民参加が大切だと考えます。また限られた財源の中で「まちづくり」を進めていくうえでも行政主導だけでは限界があります。自分たちのことは自分たちの問題として考え、みんなが話し

合って解決策を考える。地域で解決可能なこと、あるいは民間の組織が実行した方が効果が上がること、行政が行うべきことを分けて考えていくことが今以上に必要です。事業実施にあたっては、住民や自治会などの幅広い意見や提言を基に実施計画を作り、完成後もその成果を評価していくことも必要です。

住民が主体的に地域づくりにかかわり、「まち」を自分たちにとって暮らしやすい所に変えていくって初めて、住民が住むことに誇りを持てる「まち」になると思います。そのためには、町民の力を生かせる町政運営が必要で、町民議会、行政が十分な話し合いを進めた中で、信頼関係を持ちながら問題解決に向けてお互いの責任や役割を果たしていくことが必要です。私はこの地域の転換期に町政運営を担う町長として、責任の重大さを常に自覚しながら地域の状況を見極め、山積する当面の課題に取り組みとともに、大井川流域の連携の中で、森林や水、河川環境の保全、広域合併を踏まえた中で、地域の独自性を生かす地域総合計画の策定など、将来を見据えた新たな課題にも積極的に取り組むなど、今後の四年間、「まち」づくりに精一杯の力を振り絞る覚悟であります。

町民の皆様のご理解とご協力を賜りますよう、心から願います。



ふるさと夜話 三十二話  
腹が立つと「百姓」と口走った男

原田 耕 作

誰でも大方の人は、何かやって一寸間違ったり、思いどおりにならないことができると、チエツと舌打ちするものである。チエツと舌打ちして畜生と付け加える人が多い。畜生だけに止まらず「チクシヨウ、クソツタレ」と言う人もある。

犬が道端で糞をした場合は適切な言葉であるかも知れないが、人間が通常の仕事の上で一寸しくじったからといって、クソツタレと言う言葉はなんとも不可解な妙な言葉である。

昔私が警察練習所へ入所した時、同期生三十六人中に一人、何か少しでも気に食わないことがあると、必ずチエツと舌打ちしてヒヤクシヨウと言う言葉を吐く男があった。普通チクシヨウと言うところを「百姓」と言うことは、この男にとっては畜生も百姓も同じことと思っていたものと思う。練習所生活六ヶ月、しかも起居が同室だったから、「チエツ百姓」と言う吐き捨てる声を何度も耳にして、生れ乍らの百姓であった私は、その都度不快な思いがしてならなかった。

この男は警察へ入る前はタクシイの運転手をやっていたと言うから、乗客の言葉に依っては「チエツ百姓」と言いたくなる場合もあったであろう、とおかしくなったこともある。

警察署へ配属されたのち、農山村の駐在所へ勤める事になった場合、「チエツ百姓」ではとあるまい、と要らぬこと乍ら私はいささか心配した。

ところが彼は、決松警察署へ配属されて署長専属の車の運転を兼任することになったと聞いて、私は安心と同時におかしく思ったことがある。「署長を車に乗せて、どんなことがあっても「チエツ百姓」と言うことはできないであろう」と。

また私は、彼が農村に勤める身となつた場合、自分が命をつなぐ食料はほとんど「チエツ百姓」とさげすんだ人達が作り出したものだと思付くであらうか。気が付いても持ち前の「チエツ百姓」の吐声は忘れることができないだらうと私は思った。

ところが彼は警察へ入つて二年後、妻と子供を残して病に倒れてしまった。「チエツ百姓」では気分悪い男だったが、若い命を無くしたことは気の毒だった。

世の中には腹が立つてもがまんする人の方が多しと思ふ。勤忍股くぐり、という今は忘れた言葉がある。これが真の勤忍である。常に舌打ちして畜生などと口走ることは己のわすかな腹立ちを外へ向つて発散させるための言葉に過ぎないと思ふが、そのために百姓という言葉を使うという事はゆるしがたいと思ふ。しかしその後、私の知るかぎりこんな人間に逢つたことが無いことは幸いと思ふ。

しかし百姓は昔からヤげすまれてきた職業である。汚い衣服をまとい、不味い物を食ひ、土に

まみれ、あか切れを切らして生きて来た。自動車の運転手は昭和十三年頃までは新しい職業として人にうらやまれる仕事であつたから、農民に対して「チエツ百姓」と吐き捨てる思い上りがあつたものと思ふ。

三十三話 終り

次回に続く

方言の笑話

「薬代夜」もない

本川根町 中野 昌 男

古語に「魚益な」「馬鹿うーい」「やくたいなし」と載っています。が、効果のない動作のことを「やくたいもないことをするな」と言い本川根の方言として定着しております。

「やくたいもない」とは一体どういふ漢字を書くのだらうと古老に聞いたら、「それはな、薬袋の袋代もないと言ふことで、昔、親切な町のお医者さんが、病人を診てくれて、医者代がもらえないだけならまたよいが、薬袋を入れて渡した薬袋の袋代もない、まるつきり損をした事だ」と教えてくれました。

さて、現在本川根町は旧湯谷知新の千年の学校が開校され皆さん勉学に励んでおられます。講師の先生方の名簿を見たら日本上流文化圏研究所の先生方は「山梨県南巨摩郡早川町薬袋」と載っておりました。

私は早速郵便番号簿を調べました。早川町の欄に片仮名で「ミ」の欄に「薬袋」がありました。郵便局へ問い合せたら「ミナ」と読むと教えてくれました。そこで私なりに納得しました。それは「薬袋の金にもならない患者さんは、お医者さんの方で先手を打つて診ないんだな——」。「薬代夜もない」とは診察しない先生の方が役者が一枚上じゃあないだらうぞ。

# 私の中の ふるさと

社長 伊藤 祐一さん(65)  
トキキョウ  
羽田

大井川中流の中  
川根村(現中川根

町)に高校を卒業  
するまで暮らし

ました。大井川と  
それを挟む山々

の豊かな自然に  
囲まれ、魚釣りや

山菜採りに走り  
回っていました。

高さ三十メートルは  
ある大井川に架か

るつり橋を肝試  
しに自転車の手放して

渡ったことなど、ちやう  
ど戦後の苦しい時代だ

ったはずなのに、楽しい  
思い出でいっぱいです。

高校、大学時代には  
休みのたびに友人と連

れたって、大井川の支流  
をさかのぼり、泊まりが

けて釣りに出かけました。

## 静岡県中川根町

はねた  
田



中川根町下長尾  
字高手山出身

### 童心を取り戻す大井川

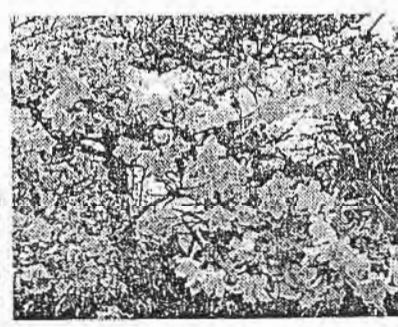
沢や尾根伝いに奥地に入っては、三〇センチ級のヤマメを一人三十四程度は釣りました。この若の裏の淵には、この生き物がいると言えらるほど、大井川周辺の生態に精通していたのです。

大井川の清流から立ちのぼる川霧と、深い山々からわきあがる山霧に包まれて育つ川根茶は、透き通ったきれいな色と清楚な香り、苦みの中に何とも言えない甘みを持つ銘茶として知られています。

私の家も茶畑を営んでいて、蒸し機やみみ機、乾燥機に囲まれて育ちました。初夏の茶摘みのシーズンには十人ぐらいい人の泊まりがけで手伝いに訪れるほどで、私も摘んできた葉っぱを蒸したり、乾燥させたりする作業を手伝いました。

父はものすごくまじめな人でした。代々の地主だったのに、祖父が保証人となったおかげで財産すべてを失った。親戚の支えもあ

〔中川根町〕県のほぼ中央部、大井川流域。ほどに位置する。JR東海道線の金谷からはSLで有名な大井川鉄道を利用すると約四十分。町のほぼ真ん中を大井川鉄道が縦断する。農林業が主要産業で特に茶の栽培・加工に力を注いでいる。川根茶は銘茶として全国に知られる。



白い花の美しさで知られるゴヨウツツジ(シロヤシオ)

町の北部には海拔千メートルを超える山々がそびえ、山と川の豊かな自然環境が楽しめる。奥大井川立自然公園としてハイキングコースが整備されている。珍しい動植物も見られることから訪れる観光客は多い。

### 日本茶とSLの町

一九六二年に中川根村から町制に移行し、今年四月で施行四十周年を迎える。これを機に町では毎年開催している自然観察会を充実させた特別のハイキングを企画中だ。五月ごろから開花するゴヨウツツジ(別名シロヤシオ)が敬宮愛子さまのお印に決まったことから、新しいにぎわいにつながるかと町では期待している。

って、働きつめて盛り返したのです。そんな苦労入りの父が、前の会社のNECで働きながら取った私の学費を見て、「人間努力が大切だ」と喜んでくれた姿が忘れられません。

兄と姉の一家があり、今でも年に一回は里帰りします。情報技術(IT)不況をどう乗り切るか、忙しい毎日ですが、田舎でほとんど変わらない自然を見る、童心に戻り心が癒やされます。

日本経済新聞 二月三日付 P29 「列島プラザ」より、

2月中旬、奈良市の松本香代子さん、ほぼ同時に横濱市の長嶋辰夫さんより、羽田さんの記事を読みました。ありがとうございます。羽田さんは、中川根町の輝く星ですね。

# 歯と共に八十余年

## 高本 鷹一

大正の始め中川根村藤川の農家に生れまゝた偶々、大正十年の秋兄が九歳私が六歳の時、父親が不慮の遭難事故により世を去りまゝした。福祉の無い時代、大黒柱を失った母子家庭は、貧困の中に残り残されて行きまゝした。母は気丈で常に何かにつけ「父が無いのだから仕方ない。なさい。」の一言で叱咤されつつ物心づいて行きまゝした。

高本さんは達筆でいらっしゃる。ますから全文を高本さんの字でお送りしたかったと思ひます。

まだまだランブの時代です。母は幼な日より噛むことを奨励し、自らも堅い食べ物に挑戦して、常に手本を示してくれました。副食の小魚の骨などは皆焼いて食べたものです。「おやつ」は年中甘藷の切干や干し柿、果ては「炒菓子」など堅い物ばかり、嫌でも噛まなくてはなりません。何んでも噛むことにより自然の美味しい味がよく解ると言われ、又精神面では他人の悪口を言うと言つと歯が痛くなるよ、と諭され、こうした環境の中で噛む事に一層の興味を持ち、梅干の実など噛み砕く事を得意としたり、ことを覚えております。

当時子供で歯を磨くものなど殆ど居ませんでした。緑茶だけは口を濯ぐべく幼児よりよく飲された記憶があります。



続柄	弟(次男)	兄(長男)
生年月日	大正4年8月20日	大正元年8月17日
環境	母子家庭に育つ	母子家庭に育つ
職業	農林業に従事する	農林業に従事する
兵役	近歩入隊後10年	近歩入隊後6年
復員後	農林業の重労働50年	農林業の重労働50年
受賞	平成8年度より5回受賞	平成6年度より7回受賞
趣味	文芸、菜園	文芸、釣
現況	87才健在	90才健在



古い連れ兄弟

残念ながら紙面の都合次第とらうりに、右の兄弟自己紹介。下面短歌は高本さんの直筆です。

小学校に入学すると漸く豚毛のハブラシとライオン歯磨粉で毎朝磨く習慣が身に付いて行きまゝした。斯くして愛情と厳しさの中で育ててくれた母も五十五年の寡婦を通じて八十八歳で世を去ったが、且取右まで歯は一本も抜けていませんでした。

今にして思う事は「三っ児の魂百まで」とか、如何に幼児教育が大切であるか、母の艱の有難さをしみじみと感ずると共に八十余年が過ぎた今尚「仕方ないなさい」の一言が耳朶に残り、何んとも恋しく懐かしく語り合う茶飲み連れであります。

勤め終え樂しく攀る。九十寿坂  
長くとも良し短くともよし

# 赤石沢作業所の思い出(その一)

## 大村 勝枝

赤石沢作業所に向ったのは、平成五年四月二十七日、地名トンネルの通行式の翌日だった。私は自信がなかった。自分が勤務出来る場所ではなかったからである。「皆を待っている腹を切めろ。」と有馬所長より言われた。

赤石沢発電所第一工区は、ハザマ、三井、大成、日本国土、鉄建共同企業体であった。私は昭和六一年より六三年まで、長島タムの井川線付替の唐沢、寄倉沢トンネル工事でお世話になった中興建設工業の取締役所長福田さんが、赤石沢作業所で二年前より下請の統括所長をやっており、奥西河内作業所

は長各部所長だった。ハザマでは地名トンネルでお世話になった横田所長もおられたし、作業員の方々も皆顔ぶれが分っていたため、炊事のおは様達をたよりにして、赤石沢作業所へと出発したのである。

畑藪第一ダムまでは静岡から、登山客を乗せてバスが運行できる道路ですが、沼



平のゲートに入ってから昼間でも燈光のスイッチを入れ、運転し、車の中でもヘルメットを必ず着用すること、私は女性なので

樋口労働部長が、新就職者教育の時、危険な道が多く、対交車のすれちがいに特に留意し、男性と同じ作業服で通勤すること、スカートでは絶対危険と言われ、絶対に事故をおこさない、と自分に確信を持って行動すること。「ちやらちやらするんではないよ」ときつくだたき込まれた。

千頭から赤石沢作業所まで約二時間近く、中の宿までの運転は心細かった。主人の理解と家族の思いやりを受けて、私の人生で最もきつい通路であった。又、上司の計いで家にFAX電話を設置していたとき、自宅で仕事をこなし、週のうち二回くらい作業所へ通う職務をくり返した。

また、樫島を経て、奥西河内作業所までは、千枝岳へ登る途中の清水平の手前より西側へ下り足場の悪い道で、熊やかもしかが時々出て、女性ではかなり度胸がいるところだが、炊事の甲斐さんはいつも明るくよく下り下りした。

私は何度もうけつけたけど、山の奥で家族と離れて働く人々の御苦労を思いつくと引返せず、完成まで頑張りとうとうと現場育ちの根性が燃えた。

どうしてこんな所に工事現場があるのか、その事から順に記してみますと、まずこの位置は南アルプスの



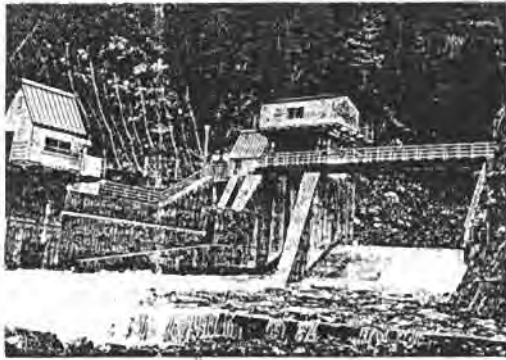
南アルプス登山口にておなじみの沼平ゲートと三軒小屋

登山口井川が表玄関となり、わが国屈指の山岳地域で、詩  
 岡、長野、山梨県に連なる大山脈です。それぞれ自然を  
 満きつする登山客にとっては楽しい場所であらうと思  
 いますが、工事現場は毎日が気の抜けない命かけの壮絶  
 な戦いでもあった。

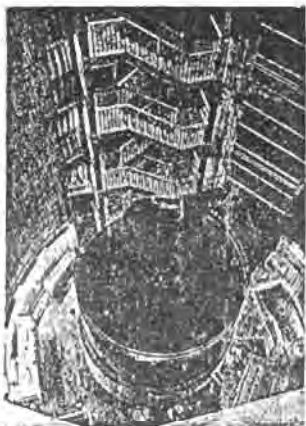
赤石沢発電所は、奥西河内川、井川、聖沢川に取水口を  
 設け、赤石沢川上流部より総延長七、〇七メートルの導  
 水路により有効落差三、二四メートルを得て、最大一、九  
 キロワットを発電するための工事で、本流、大井川上流  
 部には二軒小屋発電所、下流には赤石沢発電所があり  
 ます。

上流の二軒小屋発電所は、東俣川(大井川)西俣川に取水  
 口を設け、総延長八、三三六メートルの導水路により有効落  
 差二、八四メートルを得て最大出力三、〇六キロワットを発  
 電します。

また下流の赤石沢発電所は、赤石沢に高さ五、八メートルの  
 重力式コンクリートダムで有効貯水量一、二〇万立方メートル



↑ 赤石沢発電所奥西河内えん堤



↑ 赤石沢発電所発電機

大井川の発電所一覧表(中部電力)

発電所名	最大出力 (キロワット)	運転開始
既設	畑薙第一	137,000 昭和37年
	畑薙第二	85,000 昭和36年
	井川	82,000 昭和33年
	奥山	87,000 昭和31年
	藤山	22,200 昭和10年
	大間	18,500 昭和13年
	大井川	68,200 昭和11年
	久野屋	32,000 昭和19年
	川口	58,000 昭和35年
	赤石	39,500 平成2年
計	607,400	
計画	赤石沢	19,000 平成7年
	二軒小屋	26,000
	計	45,000
合計	652,400	

右 中部電力(株)大井川に  
 おける水力発電のほかに、  
 東京電力(株)田代川ダム、  
 大井川から、毎秒4.99m³が導  
 入され、22,600KWの発電  
 がなされている。(昭和39年)

の調査地を設け、赤石沢発電所の放流と、大井川本流と  
 赤石沢聖 残流水を導水する。ここから四、五六四メー  
 ルの導水路、一六三メートルの有効落差によって最大出  
 力三、〇九、五〇 キロワットを発電する地下式発電所です。  
 このように大井川水系には、昭和三十二年に井川発電所  
 三十二年に畑薙第一、三十七年に畑薙第一発電所を開発  
 して、さらに最上流部での水資源の有効利用を図るた  
 め赤石沢発電所を平成二年に完成させている。つづいて  
 平成七年七月三十一日、「二軒小屋発電所」と「赤石沢発  
 電所」が完成し、大井川水系における中部電力関係の最大  
 出力は合計六、五〇、四〇〇キロワットとなりました。  
 鉄道、道路などの完成により、さらに地域産業の発展にも

つなかるこの工事は、  
 中部電力が総事業  
 費三、八九億円を投じ  
 平成三年から建設を  
 進めて来りました。  
 それぞれ二軒小屋発  
 電所は第四工区まで  
 赤石沢発電所は第  
 二工区までと、二十七社  
 も大手企業を含めて  
 入っていたのです。  
 施工面では、二発電  
 所とも各取水えん堤  
 が大井川支流の上流  
 部で、道路もなく地  
 形的に険しい所に



建設したため、導水トンネル掘削後、このトンネルを使って資材、材料などの運搬を行い、施工せざるを得なかった。とやトネルの早期貫通が要求されたため、片押し高速の掘削が可能でTBM工法(マシンはコマツ)を採用した。

このようにして地形的に難なヶ所だらけで、おまけに平成六年には畑薙第二ダム下流の道路が決壊してしまいう大崩落の為、やむなく川を迂回路とし、約四十分位車を走らせ、山を登り、道路まで出て代車に乗り移ったり、資材はヘリコプターや索道、資材専用のゴンドラ等で運び、水の多い時は舟で食糧を運搬して、やっと従業員達の宿舍全てに業者が配布するといった切羽詰った日もしばしばあった。

給料日の時だった。トンネル作業員は現金払いの為、福田所長を御荷にお願ひして、九口人余の給料をリュックに入れて出発した。昨夜の大雨で、崩落場所になると川は濁流で通れず、やむなく崩落の上部を横断する事になった。足場作りした階段をやつと登り、法面に防護ネットしてある足場(崩落の中央付近)を約八メートルくらい横断しなければならぬ時——私は川より百三三メートルぐらいの所で、下を見ただけで、足がガクガクして進まない。「待って」と前の所長い言うヒ、「下を絶対見るな」とネットに五本指をくすいで静かにワシにつつけ、よろけたらワシも、もろともだぞ」と叫んだ。

「人ずつ渡らないと絶対危険だ。」  
もう何も考えられない。渡るしかない。所長にリュックを背負ってもらい、ネットにしがみついて、一歩一歩と進んだ。「危い」「恐い」と思うとよけいだめだった。トラロープに従い反対側の法面で土を踏みしめ

ホッとした時は、ひさの下がガクガクして涙が出た。帰りも同じ難所を通らなければならなかった。行きよりも帰りの方が少しは落ち着いて通水にように思う。馬方象でもほいほいとあふない坂道、いく度もいく度も登って、ほんとうに苦しかった。  
「男は一生に一度は子孫に自満出来る仕事をする時がある。」と福田所長は話しかけた。五年に渡ったの工事である。自然と一体となって工事を行う難しさ、苦難である。毎日、毎日の戦いの中にも、人の出来なれと思つていた難工事に成功した時の喜びは、ひとおであるうと心の中で応援した。

次回は赤石沢作業所その二もお祭りに

——第三話 終り——



↑インクライン、これでバスや資材、人間などを運んだ。この日は休日、筆者は前列右側。

水を満々と貯めた赤石ダム湖、中央に聖沢渡口、遠くインクラインと赤石沢発電所を望む



東京のかたすみから(三四)  
テレビの始めから終りまで

### 中国のテレビ

### 渡邊 實夫

前回はこの欄で、中国から来た技術者の研修に携わった話をしたが、それ以前の昭和二八年、既に日本側から中国へテレビのアプローチをした浜松出身の技術屋集団(芝電気や北海道放送)がいた。中国からの研修生を指導した私としては、『中国のテレビの礎』は浜松出身の尽力、貢献が大きいと誇りに思っている。

浜松高等工業の卒業生である三五年先輩の山下彰氏の指導の下、次のようにテレビ機器の開発に入った。

まず五年先輩の岸田正氏は米国RCA、英国EMIとテレビ技術契約を締結し、テレビ中継装置(マイクロFPL)テレビカメラ(オルシコン)の開発に着手した。一方彼は芝電気労組委員長として電機労連で活躍しており、芝電気労使は中国使節団(機械工合康永和主席)をテレビ工場に招き、従業員と交歓(北京と東京)合唱し、彼等と熱烈歓迎した。さらに中国使節団と親交を深めつつ、中国のテレビ放送開始の準備や根回しに入った。

同じく五年先輩の高橋裕司氏が担当してテレビスタジオ調整装置、カメラ、中継車、マイクロ中継装置などを製作し、昭和三十一年十月、中国見本市

康永和中国視察団  
電機労連芝電を視察

(写真提供 岸田氏)



昭和三十一年十月、中国見本市

で毛沢東主席をテレビ撮影して放送した。

二年先輩の中川敏男氏は岸田先輩と五百ワット放送機の試作に成功し、同じく渡辺順治氏は国産初のRC A型のオルシコンカメラの開発に成功した。

つづいて四年先輩の佐野氏は日本で初めて放送用四ヘツドビデオ(VTR)試作に成功した。

かように芝電気(現在の日立国際電気)における浜松出身者のテレビ機器開発意欲はすばらしいものがあった。このようにして昭和三十一年十月、テレビ実験放送が行われ、中国の空に初めてテレビ電波が流れたのである。

前回、北海道放送の中津川先輩の記事を載せたが、彼は北海道放送の社史に「近くて遠い国の思い出」として彼の中国における実験放送が『中国のテレビ放送のページを飾ったと思うと感慨無量であった。これから中国がどのような進展をしてゆくのか興味がある』と書いている。



↑ 実験放送のメンバー

→ 西直門に完成したテレビ実験塔



↓ 市内見物風景

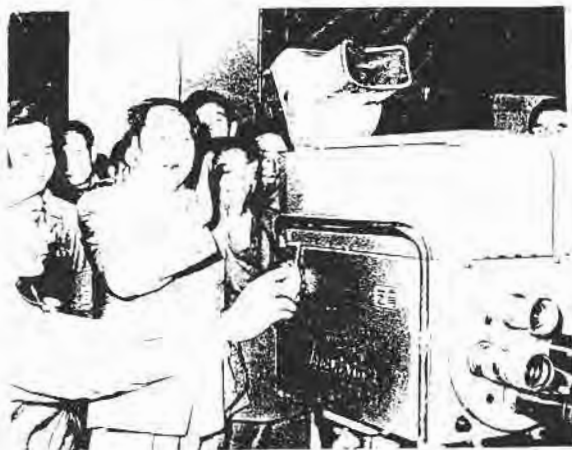


写真提供 中津川氏

夜の北京飯店ホテルで行われた歓迎前夜祭では、周恩来首相が日本のテレビ技術に大変興味を示し、一人一人に握手をして回った。一行の技術屋集団は「握手した手は厚く温かかった」と述懐している。また、実験会場には毛沢東主席も来られ、テレビカメラの前で喜んで握手している写真が当時の人民日報に大きく報じられた。



↑ 周恩来首相



中国・日本商品展覧会においてテレビカメラを見る毛沢東主席

私が勤務していたテレビ朝日は、田中角栄首相による日中国交回復を機に、他のテレビ局に先駆けて中国政府と「テレビ研修員交換協定」を結び、毎年二人ずつ、この二〇年間、四〇人の中国政府の教授、助教、講師クラスの研修員を招き、テレビ朝日の放送設備で研修、指導した。

研修テーマはテレビ送出理論、ネットワーク理論、制作技術理論と実際、音声のミキシング、音響技術、マイクロフォンセッティング、効果、録音、録音技術、映像技術、色彩理論、カメラワーク、ビデオエンジニアリング、照明技術、照明効

果、美術、セット、大道具、小道具、デジタル高精度テレビ、光ケーブル伝送、衛星中継、広報、演出と多岐にわたりテレビ全分野に及んでいた。

テレビ朝日国際室の中国研修生担当の新井課長による次の文で、昨今の中国の変わりかたが手に取るように分かると思う。

(1) 英語力。研修生は当初来日時の年齢が四十代前半の人が多かったのですが、その後、十四回目の研修生あたりから、三十代前半の人が多くなりました。その若返りと時間の経過のせいでしょうが、以前の研修生は文革時代（一九六六～七六年）に、まともな教育を受けることが出来なかった人がほとんどで、英語も出来ませんでした。その後、文革の影響を受けていない人達が増えるにしたがい、知的レベル上がり、英語もそのまゝ出来るようになりました。

(2) 考へ方。中国の対外開放の度合いや国力（経済力、国際的地位など）の高まりに伴い、研修生たちのもの考へ方も変わりました。例えば、政治的な話題でも、以前より率直に話が出来るようになり、共産党批判もタブーではなくなりました。また中国人であることの誇りが強まり、何事に対しても自信を以て臨むようになりました。

(3) 主義の違い。技術系の研修生が多い訳ですが、テレビ朝日と彼ら北京广播学院（中国政府の電子事業部）との差も、年々縮小し、ハード面ではほとんど差がないか、むしろ先の方が優れた物もあるようです。ソフト面では資本主義国と社会主義国の違いもあって、番組作りなどはまた違いがあります。これは「違い」であって、「差」とは必ずしも言えないと思います。従って、研修の価値も年々低下し

てきたといえるでしょう。昨年から研修期間を六ヶ月から一  
 等に二ヶ月に短縮したのは、当方に教えられるものが以前は  
 と多くなくなったためという、これも理由になっています。  
 (4) 生活の変化。生活面でも、以前は研修生の生活は質素で  
 したが、最近の研修生は自費で夏休みに北海道旅行に  
 出かけた。北京の両親を東京へ呼んで、その間ウイグル  
 ーマンションを自費で借りたり、日本滞在中にドル預金を  
 して、賤テウに刃んだりとずいぶん変わりました。  
 (5) 同じ仲間。一言で言えば、中国人研修生たちは(研修生に  
 限らず、一般の中国人全体が)、考え方や生活ぶりなど多く  
 の面で、年々、日本人に近づいていると言えらると思えます。

(二〇〇二年三月 記)

参考：静大工学部出身の中津川・岸田・佐野・高橋・渡辺、  
 中川先輩、芝電気社史、北海道大学同窓会誌、北海道故  
 郷社史、テレビ朝日国際室新井課長にお世話になりました。



老後を想い、

西田 亨 司

老後の生き方は住む環境と時代によって随分変  
 わって来ています。一昔前は人は倒れる迄働らき  
 続けるのが常識であり、人は病んで死ぬのではな  
 く、寿命で死ぬのだ、という理屈も罷り通る時代で

あった。

近頃世界一とも云われる長寿国である我が国では、  
 生活力もあって優雅な老後の生活を送る人達が増え  
 ています。

そして医学の進歩や福祉介護の充実という環境  
 の中で、私は、他人事のように老後を見据えていまし  
 た。一ヶ月前には、市内のある老人病院に入院中の九  
 十七歳の老人をお見舞いし、六十五歳なんて鼻たれ小  
 僧だと思ったりしました。

しかし、人間変われば変わるものです。先日友人と  
 岡部町の井田町長を訪ねた時のことです。井田氏が  
 話の中で「同僚だった野球部員十人のうち、もう五人  
 が亡くなったヨ。一昨日に藪崎が……」と云って表情  
 が一瞬暗くなりました。

私達の高校はサッカーは毎年強かったが、野球部も  
 この井田氏を中心によくまとまり、夏の県大会では  
 二年生の時ベストエイトとなり、今度亡くなった藪崎  
 投手は、当時のプロ野球の大毎オリオンズへ入団した  
 大物投手でした。

私達の六十五歳の年令で、十人中五人が他界した  
 ことに、私は大変なショックでした。これは只事では  
 すまされぬ、明日は我が身かも知れない……、こ  
 んな思いでいっぱいでした。

現代社会では、特に老後は食生活に留意し、  
 規則正しい生活をする、ことが、健康維持のために不  
 可欠であるとされる。しかし、それが原因で、ガンや  
 成人病で命を落とす人が意外と多く、私も、もっと前  
 向きに老後を見つめなおさないといけない、と思う

ようになりました。

私は先の三月で自営業に終止符を打ち、その後、今迄、残務整理をしなから、老後の生き方について摸索を始めました。

妻も私のことを心配してくれて、毎日口煩く助言してくれることに感謝さえしています。

外に出れば七人の敵とかという言葉は、今や昔で、新しいライバルは、同じ屋根の下で切磋琢磨する妻であると思います。

そして妻の強い勤めもあって、ようやく一つのことを初めました。(この内容については伏せさせていたいただきます)

先ずは、体調維持を心掛け、余りあくせくすることなく、状況を見て次のステップに移っていかねばと思っています。平凡ながら掻い摘んで老後への想いを述べさせていただきました。

最後に、お粗末ながら、次の二句に心境を託させていただきます。

書くことは 見ることよりも

ボケ防止。

川根路を 思う心に 亡き文母が。

以上

西田さんのおふる里、徳山水田の湿地が自然にマッチ

した方法で整備され、地域の皆さんの寄りどころになっております。黄色のシヨウブや、ホタルも飛んでいるよう

です。

昨年四月、しばらくの間休業していた上長尾診療所に、油谷先生が赴任して下さいました。又、徳山診療所は、今年初め、鈴木医師が旧徳山農協のところにへ開業され、休業となりました。下長尾の太下医院とあわせ、町内に三ヶ所のお医者さんが居て下さって、町民念願の医療体制が出来、やっと安心して住らせる町になりました。

さて、私事で失礼な事ですが、四月下旬から不眠状態が続き、自分なりに「何とかしなければいけない」と思いながらも日々が流れ、五月始め頃、机に向かって仕事を始めようとした時、心臓の鼓動と悪感がして健康に自信のある私が、ここで倒れたらどうしよう。まだ倒れるわけにはいかない。と思い、上長尾診療所をたずねました。

全て自分で解決しなければ……の思い込みも無理な事でしたが、心情を話し、眠らせていただいて、大変気持ち落ちつきました。眠れるお薬もいただいて、少しずつ元気を取りもとっております。

後日、息子が健康診断を受けた時、油谷先生から「心療内科」という本と、会報誌のコピーが私宛に届けられました。私一人が読ませていただけで……皆様にも是非ご覧いただきたいと考え、載せさせていただきます。

静岡労災会報 第37号 平成九年七月十五日発行より

### 桃太郎回顧

油谷 幸夫

一、心に残る言葉

神戸の病院で寝たきりの「夏さんの診断名は糖尿病、脳梗塞、老人性痴呆となっている。前主治医から引き継いで

一年になるが、老人性痴呆という病名は返上したいと思つて  
いる。

桃太郎（この名前は夏さんに載いた）が二日酔いで朝回診し  
ないと、ならすその日の午後「朝見なかった、顔が黒い」と  
指摘される。前夜酒もほとんどに風呂にも入り、朝早く回診  
すると「今日はきれい」とお誉め戴ける。夏さんの澄み  
切った瞳には、桃太郎の心、過去がすべて見通してあるよ  
うだ。

平成五年十二月十二日午後、夏さんは「今日は桃太郎が朝来  
なかった」と思いながら、窓際の日溜まりのなかで、いつも  
のようになうとうとしはじめた。夏さんの脳裏で桃太郎の  
過去の断面が現れては消えた――。

恋は世界を一変させる。前日までの乾いた道、色褪せ  
た木々、無意味に咲く畦道の野花、悉く自らとは縁のな  
かった存在が、突然、生き生きとした命を得、個々の存在  
を主張しながらも衝突しない。森羅万象悉く固有の  
美しさを持つてくる。そのような世界が現われる。しかし、  
恋が去れば再び寂寥に満ちた暗闇に閉ざされる。

もっと確かを毀れない世界、毀れても毀れていない世界、  
死に瀕する病を得ても笑みを忘れない世界、そのような  
世界がないものか、十九の桃太郎は捜した。

既にわれ生けるにあらす基督、我にありて生けるなり  
（善の研究 第四編 第一章）

十年程前、桃太郎は、兄が肺癌で死んだあと、残された父  
の面倒をみる甲斐性がなかった。岡山で医学の勉強を続け  
るが、勉強を断念して父の面倒をみるか、思い迷った。  
結局、父を特別養護老人ホームに捨て、一度も見舞う  
ことなく失った。葬儀にも出なかった。いやよられなかった。

「若シ今生ヲ捨テ仏道ニ入ラバ、老母直饒餓死ス  
トモ、一子ヲ放シテ道ニ入レシムル功徳、豈ニ得道ノ  
良縁ニ非ザランヤ」(正法眼蔵随聞記四ノ十)

道を歩いては無数の虫を踏み殺し、皮靴の軋む音に牛  
の鳴き声を聞き心を痛めることがあっても、神戸牛、松  
葉蟹に舌鼓をうちながら酒を飲む。隣人を傷つけず  
には生きられない業の深さ。この辺で幾分付けを返  
さなければ地獄に落ちるは必定と苛立っていた矢先、  
その心の隙間を狙ってか、加計呂麻島から疲れ切った  
秋鳥の親子が病院の屋上に羽を休めた。宮崎上空で  
猛禽におそわれ傷だらけであった。親鳥は桃太郎に  
南の離島に医者が必要だと訴えた。

「たとひ、法然上人にすかさずせまらせて、念仏して、  
地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ  
（歎異抄二）

夏さんがまた心地よくまどろんでいた午後二時三十分  
桃太郎は大阪国際空港より加計呂麻島に向かって飛  
び立った。

## 二、離島

奄美大島南端の町、古仁屋から海上タクシーに乗  
り、紺碧の海を切り裂きながら加計呂麻島に向った。  
戦争により焼かれた後、人の手が加わった、このない  
山並みは絨毯の感触で砂浜まで迫っていた。桃太郎  
は体験したことの無い自然の美しさに圧倒され、言葉  
を失っている間に、加計呂麻島の瀬相に接岸した。  
加計呂麻島は、西約四〇キロ、南北約一〇キロの離島

で、海岸にへばりついた三〇の地区より成り立っていた。特に産業もなく、取り残された約一七〇〇名の住民が、猫の額ほどの田畑で、家族が食べる程度の農耕を営んでいた。

翌朝、医者は桃太郎ひとりとなった。病院の送迎バスで到着した老人達で、外来の長椅子は瞬く間に埋め尽くされた。その老人達の足元で蟹が這っていた。

午前中は外来診察、内視鏡検査等、午後は病棟回診、あるいは訪問診療の毎日が始まった。

黄昏時、患者のいなくなった病院では、波の音、風の音以外に耳に達する音もなく、やがて病院の外は漆黒の闇となり、満天の星は手が届くほど近くにあった。桃太郎にとって、その夜の暗闇が最大の敵となり立ち塞がった。

半年もすると医者も増え、加計呂麻の南にある請島、与路島にも往診を開始した。年数件のハブ咬症、溶接工の電気性眼炎、老婆の膿子宮、骨折等、様々な疾患に忙殺された。

しかし、日中駆けずり回っている間はよいのだが、漆黒の闇に閉ざされると、赴任時の覚悟も、ともすれば萎えてしまうのであった。

ただひたすら与えること  
ただひたすら愛すること、

と桃太郎はつぶやき、肝に銘じる毎日となった。  
可愛する者は敗者である。そして苦しまねばならぬ。(トニオ・クレール)

平成六年十二月中旬、桃太郎は食思不振、嘔吐、不眠を訴えるようになった。トランスアミンナーゼが三〇

〇〇前後あり、十二月二十八日、夏さんのいる関西へ向って、一旦加計呂麻を後にした。

終り

### ふる里通信発行が遅れたお詫び

四月末発行を目指して、取り組んでおりましたが、四月二十二日突然に、中原建設株式会社が自己破産手続きを申請した旨の葉書が届きました。五月中旬、自己破産となりました。創業八十年の老舗の建築(主に木造住宅)業者で、町内にあたる影響も大きいものでした。

私の家は製材業を営んでおり、売上の五・六〇パーセントを建築材として中原建設に納めておりましたので、昨年末から四月二十日迄の売上は、いたたける見通しを立てておりません。そればかりか、夫が中原建設(株)の島田信用金庫、静岡銀行(静岡県信用保証協会含む)の借入金の連帯保証人になっている為、大変な立場に立たされてしまいました。保証人の為、中川根町が対策して下さった。連鎖倒産防止関連の融資も受けられません。九月始め債権者会議が開かれますから、自己破産の全容が判ると思いますが、いずれにしても夫に課せられた責任は重く、将来どの様に推移するか、見当もつきません。周囲、成長した伐期の森林に囲まれ、地場産業として後継ぎも頑張っており、何とかなる現在の仕事を続けながら、保証人の責任を果たす事が出来ればと願う毎日です。

この様な事から、四月二十二日を境に、対心におかれ、対策を考へ、新たな得意先をさがし、家族会議を重ね、専門家をたずね、相談する等々の日々におかれて、時間

定期購読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部 年共 200円  
皆様の定期購読が、ふる里通信の発行を支えます。年間4回の発行(3ヶ月ごと)を予定しております。

今回で購読が切れの方と始めて、ふる里通信をご覧になれる方には、郵便振替用紙と同封致しますから、これからご購読をよろしくお願ひします。もし、購読を止めたい時や、住所変更のありも、是非ご連絡下さい。

郵便振替通知票番号

00870-4-81556

発行責任者 〒428-0313

静岡県榛原郡中川根町上長尾 859-6

小 沢 節 子

TEL. 0547-56-0015

FAX 0547-56-0020



今年も精進的にも余裕がなく、預かった原稿もたまりながら、書けない状態になってしまいました。時間もたつうちに心配して下さる方々や、仕事と下さる工務店さん等々、様々な皆様を支えられ、仕事の方も再建しつつあります。努力を重ね、何とかな信用を取り戻したいと思ひます。二ヶ月の発行が遅れ、この事をお詫び申し上げます。共に、家業を支えながら、私の今迄して来た、地域づくり活動や、自然環境保護運動を含め、中川根ふる里通信は、これから、発行致します。どうか、どうぞ、よろしくお願ひします。62号は、八月末を予定しております。寄稿される方は、どうぞ、八月十日頃までにお寄せ下さい。お待ちしております。

今年、中川根町が町制施行四十周年の年になります。記念誌発行や、十一月初旬には、産業祭を中心に、大きなイベントも計画されている模様です。是非、ふる里へ来て下さい。



今年、春が早かった。梅も桃も桜も二週間以上早く花が咲きました。特に桜の花は三月十五日には咲きはじめ、四月を待たずに散っていきまふた。桜の早く咲く年は、晩霜が来てお茶が被害にあり、の諺も、今年に当たらず。四月二十日前の茶始めは、歴史にもないほどの事にさうです。お陰様で、今年、は、寒害の少ない良質のお茶がとれました。ゴルフで、ウイークあたりが例年、茶仕事ウイーク、行楽の車を横目に、茶摘みに専念、あるいは、人手をあてにしていたのに、芽が出んもんでまだ摘めん、つまらん、グのつぶやきも聞こえず、ゴルフウイークには、早くもお茶が終りになつたところが、多かつたようです。季節に敏感な自然界も同じで、アカヤシオの花も二週間以上早く咲き、中川根町自然の森観察会も、予定を一週間早めて、四月十八日に行われました。盛りを過ぎて、大札山山頂付近のみに、見事な花が見られた。ただ、残念でした。例年四月下旬、まだ芽吹きのない大札山一帯に、ピンクのアカヤシオが、あちこちに咲いているのが見えますが、すでに十八日には、落葉広葉樹のほとんどが芽吹いていて、アカヤシオの確認も出来ませんでした。アカヤシオが咲いて一ヶ月後、蕎麦粒山一帯に、シロヤシオが咲きます。五月中旬が見ごろとの期待が、つた。特に、愛子さまのお印、元年ですから、と、ところが、残念な事に、今年、は、花が咲かない年、二、三、裏年に、なつてしまいました。昨年、一昨年と見事な花を咲かせた、五葉つづじも、今年はお休み、二年でした。来年は、さうと美しいと見せてくれることでしょう。